

Daughters are Forever: 先住民の宇宙観と女性*

浜由美子**

I はじめに

Daughters are Forever の著者であるリー・マラクル (Lee Maracle) は1950年にノース・ヴァンクーヴァで生まれた。コースト・セーリッシュ (Coast Salish) 族の一部族であるフレーザー川下流に住むストロー (Stohlo) 族出身で、有名な首長であったChief Dan George⁽¹⁾の孫である。『リー・マラクル: 先住民作家としての道程』でも述べたように、マラクルは「両親はいつも喧嘩をしており父親が暴力を振るうような家庭で育った。16歳で家を出て…トロントで麻薬やアルコール漬けのヒッピー生活をしながら、共産主義やマルクス主義に触れ、政治活動に目覚めていく。18歳前後から…書き始めたが、その後サイモン・フレーザー大学で勉強し…執筆の他に、先住民の主権回復やフェミニズムに関する講演をしたり、詩の朗読をしたり、劇に出たり、大学で教えたり、各種ワークショップを開催したり、先住民教育に携わったりと幅広い分野で活躍している」多作で知られる先住民作家である。今までの主な著作をまとめると年代順に次のようになる。

自叙伝 *Bobbi Lee, Indian Rebel* (Women's Press出版、1990年。1975年に*Bobbie Lee: Volume One*の題で初刷)

エッセイ集 *I Am Woman: A Native Perspective on Sociology and Feminism* (Press Gang Publishers出版、1996年。1988年初版)

短編集 *Sojourner's Truth and Other Stories* (Press Gang Publishers出版、1990年)

小説 *Sundogs* (Theytus出版、1992年)

小説 *Ravensong* (Press Gang Publishers出版、1993年)

短編 “Where Love Winds Itself Around Desire,” *First Fish & First People: Salmon Tales of the North Pacific Rim* (University of Washington Press出版、1998年。pp.161-79)

詩集 *Bentbox* (Theytus出版、2000年)

小説 *Will's Garden* (Theytus出版、2002年)

小説 *Daughters are Forever* (Polestar出版、2002年)

* *Daughters are Forever*: First Nations' Cosmology and the Role of Women

** Yumiko Hama 十文字学園女子大学短期大学部 英語英文専攻 (English Language and Literature)

キーワード: Westwind, stillness, passion, love, truth, transformation

本稿で取り上げる *Daughters are Forever* (以後 *DaF*) は今までマラクルが扱ってきたテーマ、すなわち、何百年と続いてきた植民・同化政策および人種差別、政治運動、家庭内暴力、両文化の相克、その結果とも言える育児放棄や罪悪感・恥・怒りの感情との対峙などのテーマを継承しながら、児童虐待の被害者である母親マリリン (Marilyn) が心ならずも加害者となってしまった心の葛藤に焦点を当てている。そして、そこから脱却する道が、愛、勇気、真実を持ち先住民としてのルーツへ立ち帰る道であることをマリリンの心の内奥に入り込むことにより示している。「セイリッシュ語り聞かせ」(Salish Storytelling) の伝統に則って、語られる語りには、前提となる先住民の宇宙観の理解が必要である。さらに、夢と現実の境のギリギリのところで提示される心の軋轢は、息 (breath) から肌 (skin) にいたるまでそれ自体の生命・意思を持って、何層にも重なって、叙情詩的リズムを持った美しい文体で綴られているが、その流れについていくのが前提知識なしには難しい小説であろう。このような難しさはあっても、構成、表現スタイルにおいて、多くの先住民作家の作品が自叙伝の域を出ないと言う一般論 (Carmen 1) の枠を大きく超えている作品であると考えられる。そこで、本稿では、先住民の創世神話に繋がる宇宙観とそれを通して和解への道をたどる女性の変容 (transformation) の旅という観点からこの作品を考察していく。

Ravensong と “Where Love Winds Itself Around Desire” (以後 *WLWIAD*)⁽²⁾ は、*DaF* の理解への前編とも言える作品となっているので、それらの作品からの引用もひきながら、先住民の宇宙観の背景として、創世神話、風と夢の働き、語り聞かせの伝統などに関して、まず検討する。他の作品に関しては拙稿『リー・マラクル：先住民作家としての道程』を参照されたい。

II 作品理解への背景

1 創世神話とワタリガラス (Raven) 神話

DaF で「初めに一つの言語、合意があり、生き物たちの境界はちゃんと守られていた」(13) という合意というのは何のことか。また、「侵入者が来る前に、兄弟の争い、精神的殺戮 (spiritual cannibalism)、日和見主義、近親相姦があったが、ワタリガラス、鷲、大地が協力して法 (Law) を回復した」(38) とも言っている。このワタリガラス神話と創世神話における原初の法の制定がどのようになされたかを *WLWIAD* で見てみる。また、この模様は *Sojourner's Truth* の “World War 1”⁽³⁾ にも出てくる。

北西海岸インディアンにとり、ワタリガラスは、この世の創世主でもあり、光や水、人間をももたらした鳥である。*WLWIAD* は「ワタリガラスは何でもできる」“Raven can do anything.” (161) という鮭のコメントで始まり、次のように続く。

Inspired, she can gather the spirit world together, engaging everything — flora, fauna, stone, wind and sea — in a single decision-making process. She is powerful, clever and tricky. She can re-create sound and transform you, engage you in a way you have never been engaged. (161)

ワタリガラスは何でもでき、花から、風、海に至るまで駆使し、精神界を自分の決定に従って動かす存在である。また、こうも言っている。

She's always minding the business of the rest of the world, eavesdropping, weighing voice and action against consequence. She minds the business of the two-leggeds the most. ... Humans are capable of wanting things which defy their needs, counter their interests and destroy the very spiritual sensibility they were given when they came into the world. The original humans of Turtle Island were there in the sky world when we all received our original instructions... It is a spiritual world. Spirit moves living beings like wind moves weather... We were all instructed to be careful of one another, gauge consequences of our actions and return to the sky wiser than when we came. From this body of wisdom come the laws governing conduct. (161-2)

ワタリガラスは特に人間のことを気にかけているが、人間は欲のために原初に与えられた感性を失ってしまった。タートル・アイランドに住み始めた人間は、天空に住んでいた時に全てのものと共に最初の教えを受けた。お互いに気遣い、行動の結果を考え、生まれたときより賢くなって天空に戻らなければならないのである。

コースト・セーリッシュ族の創世神話の一つとして、キース・カールソン (Keith Carlson) は「天空から来た最初の人々は、世界に秩序をもたらすような特別な知識を与えられ、それを用いて変容を起こした」(6)と述べているが、*DaF*でマラクルは創世に関してさらにストーリーを展開させている。「下界に降りてきた天空の女性 (sky woman) が星に導かれ処女受胎をし、娘を生んだ。その娘に西風 (Westwind) が命を宿らせ、その息子たちが、息で子供たちを作り、子孫がタートル・アイランドで栄えていった。そして、東西南北の風が、春、夏、秋、冬をもたらすようになった」(12-3)。また、「侵略者たちが来る前には、安全に暮らす女性たちの良識に根ざした世界があった」(13)。この良識に根ざした世界、先住民としてのルーツからの隔絶をどのように回復できるかが主人公マリリンの変容の旅となる。

*Ravensong*でワタリガラスは主人公ステイシー (Stacey) に働きかけ、変容を起こそうとしたが、神話作家 (myth maker) としてのマラクル⁽⁴⁾は*DaF*でその役割を西風に与えている。では、ここで、風に関して考察してみる。

2 西風

*DaF*は「西風が忍び寄ってきた」「Westwind crept.」という文で始まり、西風がいかに飽くなき欲望 (insatiable desire) を持って新しい生命に息吹を与えるかが美しく、叙情的に描かれている。東西南北の4方向は先住民にとって非常に大事な概念である。大いなる存在に祈る儀式パイプセレモニーでは、タバコを詰めながら、4方向へ祈る。マーゴット・エドモンズ (Margot Edmonds) は、*Voices of the Winds*で次のように語っている。

Indians believed every wind breathed forth the spirit of the one who made the wind

blow, however far away, and they had their own special names for the many spirit voices of the winds. "Indians hear them in every sigh, whisper, bluster, roar, moan, or whistle of the wind — each filled with spirit and power for the one who listened," described Martin Sampson, an Indian Grandfather. (xiv)

このように風は聞く耳を持つものにはさまざまな形でメッセージを伝えるのである。2008年7月に行われた『第34回北米先住民長老と若者の集い』⁽⁵⁾でも、ガテマラ・マヤ族の祈りの儀式の中で、「風のメッセージを聞こう」と呼びかけていた。

南風 (Southwind) は優しさ、忍耐、癒し。東風 (Eastwind) は知性、叡智、偽装。北風 (Northwind) は対処行動 (responsive activism)。西風は情熱 (13, 57) を表す。風は命 (Being)、成長、動き、変容を生成するなど、生の営みに直接関与している。風を聴くには息が自由にできなくてはならないが、マラクルは風を変革者 (transformer) として、その力に動きを与え、どのようにマリリンに働きかけるかを映像化して見せている。4方向の風が、直接にマリリンを刺激し、生の躍動へと動かし、行動へ駆り立てていく。心の深奥の動きが息、肌などを通し風の動きと連動する。

人々が「身を潜め静まり返り」 (stillness)、惰性的のように生活する中で「西風はロマンスをささやかなくなり、男女の縁結びをしなくなったが、夢でマリリンに語りかけ、新しい時代の到来を告げる」 (21) 働きをしている。

The stillness of the lone survivor...halted Eastwind's connection to Turtle Island women but did not sever it. Eastwind brings first light, moving light, spirited light — the light that encourages being. Disconnected, Marilyn could not feel herself being fathered in the direction of free being. Un-free she cannot find peace in her varied emotional states. If she felt emotions she would react, sometimes badly. She did not trust her emotional expression to travel in any sure and reasonable direction. This made her fear any emotional expression. Fear which cannot be expressed finds its reaction in anger, hot or cold, smoldering and old. Cut off from Eastwind, Southwind's presence is felt only dimly. The dim hint of Southwind sharpens Westwind, which cancels out Northwind. Southwind brings wellness, soft warmth and nurturing. Northwind is active, brings with him the execution of the journey from light to breath (,) to passion, to action. (157-8)

光をもたらす東風と人間との関係はまさに寸断直前になっており、マリリンは感情の爆発を怖れて、感情表現ができなくなり、恐怖と怒りに捕らわれている。そこで、風が、光から、息、熱情、行動へマリリンを向かわせる役割をする。西風がマリリンの身体の中に入り、自由に行き来するようになると、開放され変容へと向かえるのである。

ところで、西風は何に基づき突き動かされているのか。

Westwind has its origins in the bottom of the sea, where the mother of deep thought

lives. Westwind is warm and unpredictable only to human children who fail to understand he responds to this woman who lives at the bottom of the sea. Earth whispers her yearnings to Westwind... Westwind loves the woman at the bottom of the sea. His wind, his song, his breath is a response to the woman at the bottom of the sea. (208-9)

海の底に住む、西風の愛する‘思考の母’の声に従っているのである。この海の女性は最後にまた登場する。次に、マリリンが現在と過去、未来を時空を超えて行き来する‘夢’の世界に関して考えてみる。

3 ヴィジョン (vision) / イメージ (image) と夢

DaFで語られるほんの4、5日間のマリリンの現実の生活を、過去と未来へ自由につながるが‘夢’である。

最初に天空から降りてきた女性は「夢の子、命の夢、真実の夢、火・熱・寒さの夢」“Dream child, dream of being, dream of truth, dream of fire (,) heat and cold” (12) である。‘夢’は全てに関連し、前もっていろいろなことを教えてくれると先住民は考えている。マリリンは、風の語りかけを聞いたり、幻影 (image) を見たりするが、西洋的教育が阻害し、これを「時間の空白」(gapping) とか「非現実への移行」(slipping) とか精神分裂気味だと思い、心を悩ませている。だが、実は風の働きかけであることが読み手には明かされる。このような“slipping”はヴィジョン・クエスト⁽⁶⁾で夢を求めることにより、自然や先祖から助けを得る伝統的学習法と同じだと言える。多くの先住民たちが、サンダンスなど宗教的儀式に参加するときには、今でも事前にヴィジョン・クエストを行っている。

マジョリー・フィー (Marjorie Fee) との対談でマラクルは「私は狼族 (Wolf Clan) であるが、狼は透視能力があり、過去と現在を結ぶ役割を担っている」(Fee 209) のだと述べている。それをこの作品で風という媒体を用いて縦横に駆使していると言える。西風などの介入により、マリリンはモホーク族の男性T.J.に会う前に彼のイメージを見る。筆者の知人の先住民には、会ったこともない男性を夢で見て、結婚した人が二人いるので、マリリンのケースがあながちありえないことではないと思える。‘夢’が非常に強力なお告げであることは現在でも信じられており、誰かがヴィジョンを見たと言うときに、それは尊重される。マリリンもエルジー (Elsie) の子供の最期を見たり、父や祖母のイメージを見たりするのだが、マリリンにはそれは感覚が狂ってきているとしか思えない。

Time is a critical illusion. It is necessary to separate our dream world from the real world, from what is hope and what is planning from what is desired and what is executed. The separation of moments in time defines sanity. Marilyn searched for a way to locate herself somewhere in time. (64)

“Slipping” や “gapping” の状況で、マリリンは時の枠に自分をはめ込もうとするが、時をは

み出して夢想する中で、自らの正気も疑う。娘二人も母親の異変に気がつき助言する。

“Go to a treatment centre that deals with early childhood stuff from a cultural perspective. Most of us just hurt. Being Indian hurts, Mom” (245).

インディアンであることは本当に傷つくことであるから、幼児のころの経験を解きほぐしてくれる診療所へ行くことを薦める。

The ups and downs of going in and out of the present had been loosening the logical bolts holding her together... (207)

しかし、徐々に時をはみ出すことにより、マリリンから論理の縛りが解き放たれていく。では、これから、この作品における語り聞かせの技法を考えてみる。

4 語り聞かせ (Storytelling)

キース・カールソン (Keith Carlson) は、語り聞かせに関して「語り聞かせは…価値観や技術を伝え、物事の起源、人間性、因果関係を示している。…動物や自然は伝承されてきた価値観を強調するために人格化されて」おり、「その価値は現代の白人社会においても有効で…若者への知恵の源となる」(4)と述べている。また、通常、話の進行と共に、人の姿をしたワタリガラスが本当の姿を現したりして「変容 (transformation) が起こる」(Kroeber 7)。

語り聞かせは、特に冬の長い夜にはロング・ハウス (Long House—大きな集合家屋) で、夏は戸外で火を囲んで同族の人々に語り継がれてきた口承で、今でも語りと共に芝居をする『語り聞かせの夕べ』などがアラスカやカナダ西海岸でよく開催されている。筆者も何度か見てそのシンプル、かつ洗練された語りの効果に感動した。

マラクルは、語り聞かせに関して *Sojourner's Truth* の序文で次のように述べている。

Most of our stories don't have orthodox “conclusions”; that is left to the listeners, who we trust will draw useful lessons from the story — not necessarily the lessons we wish them to draw, but all conclusions are considered valid. (11)

話から結論を引き出すのは読者で、どのような結論も有効なのである⁽⁷⁾。また、語り聞かせでは、「何だって起こりえる」(Kroeber 5) のである。聞き手は心を開いて、疑わずに想像の世界を飛翔すればいいと言えるだろう。

マラクルはこの作品に見られる “Salish Storytelling” の技法に関して、インタビューでその特徴として次の3点を挙げている。まず、語り聞かせのように、ことばを詩として表現すること。セーリッシュ語は、英語と違い詩的表現形態であるので、その感性を伝えること (Fee 211)。次に、文章は口唱でもなければならぬということ。口唱は、「人間の状況、創造者との関係、他の全ての存在との平和的共存を保証するような方向性を希求」し、「情熱、感情、人

物」を表現しなければならない (Fee 206)。この二点をマラクルの文体は映していると筆者は考える。

最後に、現代における狼族の神話作家として、「過去と現在をつなぎ」、「人々がどんな変化が起きようとそれに適応できるように助ける」使命があるということ (Fee 209)。マラクルは「私を書く唯一の理由は心の変化 (change of heart) をもたらすためである」 (Fee 212) と述べており、それがマリリンの変容であり、読み手が主役と言うマラクル (浜 54) にとり、読み手、ひいては、現代の北西海岸に住む先住民女性、虐待を受けた女性の変容ともなりうるであろう。

5 作中の先住民政治運動

DaF の背景として出てくる先住民による反政府抗議運動には、オカ (Oka) 危機⁽⁸⁾、イパワッシュ (Ipperwash) 問題⁽⁹⁾、マウント・カーリー (Mt. Currie) 道路封鎖⁽¹⁰⁾ などがある。そして、マリリン自身も講演をし、「自分たちに任せてくれ」“Leave us to do this ourselves.” (90) をスローガンとしている。ただ、「カナダのマルクス主義者」(Carmen 1) と言われ、活発な政治活動をしてきたマラクルが、この作品では、これら政治運動を先住民問題の解決策としてではなく、作品のテーマの背景として提示している。問題解決には女性が過去から継承してきた “stillness” からの解放、すなわち、家長であった女性の強さや再生への回帰が大切であるとしている。「オカ・シンδροーム」(Oka Syndorome) とか、「イパワッシュ後遺症」(Ipperwash hangover) と言うことばを使い、これら政治運動が過去に拘泥し前に進めない状況を生み出し、前進を阻む要素となりうることを示している。

I Am Woman などで戦う勇気を鼓舞し、連帯活動を提唱した⁽¹¹⁾ のが、*DaF* では、個人の内的変容を基点とするスタンスを取っている。「この問題を解く鍵は女性の心の中にある」“The key to sorting this out lay inside the women themselves.” (199) のである。では、実際に作品を検討していく。

Ⅲ 作品概要

この作品は4部に分かれているので順を追って簡単に考察する。北米先住民は4という数で一サイクルが終了すると考えているので、4部の後には新たなスタートがあることが予測される。

Part 1 西海岸先住民の歴史

西風の描写で始まる話は、200年以上前に遡る。まず、侵略者が到来し、大量虐殺、略奪、陵辱が行われた。次に侵略者がもたらした伝染病が村を襲い、その後には、病原菌の付いた毛布が種族抹消の目的で配布された。女は、ロング・ハウス、大家族、自分の存在をも放棄し、女性の優しさは静かな沈黙へと変わった。人が死にいく中で男は恥を飲み込み、勇気をなくし、意味なくうろつき、酒におぼれ、女をもてあそんだ。女たちは日常の些細なことにある永続性を味わえなくなり、この状況が200年続いた。「文化の継承者」(the keepers of cultural survival)

である女性は最善の自衛策として娘たちに“stillness”を伝えた。この状況は*Ravensong*の悲劇的結末でもあった。

The world floated in, covering us in paralyzing silence and over the next decade the village fell apart. Women left to marry after that...the women lost the safety of family. The village lost its clan base because of it. Now we are caught in an epidemic of our own making and we have no idea how to fight it. (197)

村の沈黙は深まり、その後10年で村は崩壊し、女性が村を出てクラン制度⁽¹²⁾は崩れ、自らが作り出した伝染病に侵され、どう闘ったらいいかわからないという結末である。

この状況から脱却するために、*DaF*では母系社会の回帰を再生への鍵として、それを書名としている。

Daughters are forever. Daughters never leave. Sons are temporary; they belong to future families... Sons are dispensable, but every daughter is needed to recreate the villagers. (22)

娘たちは永遠である。娘は家を出て行かない。息子は出て行き、家族を持つ。息子はいなくてもいいが、娘は村を起こすのに必要なのだ。この意識を「トラウマ後のストレス・シンドローム」(post-traumatic stress syndrome)にある女性たちに呼び起こさなくてはいけないのである。

Part 1でマリリンへの言及は一言だけで、誰であるかもわからないが、この何世代にもわたる歴史の重みがマリリンにのしかかっている。

Part 2 マリリンの人生・先住民女性の疎外感

発狂したかのような父の事故死に始まり、母親の無関心、義父の残虐な仕打ちや暴力などのショックの後遺症(residual shock)で、45歳、大卒のソーシャルワーカーであるマリリンは、夢も見ない「精神的マヒ状態」(emotional paralysis)にある。西風が先祖の声を聞くように働きかけるが、マリリンには「確信できるような記憶はなく」(no memories of reassurance)、息が詰まった状態にある。

ところが、エルジー・ジョーンズ(Elsie Jones)のケースを扱っているうちに、これが、まさに自分の問題、多くの先住民の女性の問題でもあることを認識する。エルジーはアルコール中毒で3人の子供の世話もできないほどの無気力、無表情の死を生きしており、子供を保護司に連れて行かれる。居留地への囲い込み政策と伝統文化禁止の100年後に暮らしているエルジーは、闘う気力、生きる気力も喪失している。マリリンは、瀕死の状態にあるエルジーの子供の最期を南風の働きかけで幻影のように見て、ことの真相を知る。

マリリンも長女を児童保護司に連れて行かれたが、西風の熱情、北風の冷静さと行動力に助けられて闘い10日後に取り返した。しかし、それ以後母親と子供を「見えない橋が分けてい

る」。政府は、寄宿学校政策の後には、同じく親からの隔離作戦である里親制度で子供を取り上げていった。その結果、多くの親は罪悪感と恥に苦しみ、アルコール漬けの「寄宿学校後遺症」(residential school hangover) 状態にある。

マリリンは、夫に蒸発された後、義理の父親が暴力を振るったように、子供を感情に任せて木製スプーンで殴っていた。今は自制できるようになっているが、過去の子供への肉体的、精神的虐待に最悪感を抱きながら、子供が親のために存在し、世話するようになってしまった親子の逆転関係を修復できないままである。

北風がマリリンの心を開くように働きかける。

Northwind wanted Marilyn to become conscious. He knew she had plenty of ideas about how she arrived where she was, but no single one of them seemed big enough to justify it. Further, he knew there was no justification; but there could be redemption if she actively accepted what she had done. The trick failed. Sighing, chilly and sad, Northwind withdrew. (115)

状況がどうであったにしろ、自分の行為を正当化することはできず、自分のしたことを受け入れるところから償いが始まることを北風はマリリンに知らせようとするが、不成功に終わる。

Part 3 マリリンの癒しへの苦闘：過去の連鎖からの開放

マリリンは講演をしにトロントへ向かう。そこで、カケス (Bluejay) と西風が、マリリンと T.J. を結びつけることを企て、マリリンは T.J. のイメージを事前に見る。Part 3 では、この T.J. との出会い、祖母の思い出がマリリンの心の中でタイムスリップして展開する。

エルジーの心の扉が祖母の話で開いたように、マリリンは祖母のことばをたくさん思い出してくる。なくなった祖母が目の前に座って語りかける。

Meaning is so important, but expression is more important. In not expressing yourself, you lose meaning. When you lose meaning, you lose value... Speak, child, from the heart, from the mind, from the body, from the spirit. (172)

「寄宿学校による静けさ」(residential school quiet) で、遊び友達も兄弟もいない中でマリリンはずっと孤独感にさいなまされてきた。それが祖母から「表現するということがどんなに大事か、表現しなければ、その意味も価値も失われてしまうから、全身全霊をこめて話すのだ」と言われ、祖母への愛が胸に迫ってくる。今まで祖母の言い付けに従って生きてはこなかったのに、急に祖母のことばが重みを帯びてきた。

また、一方、T.J. との出会いがマリリンの感情を開放する。

She felt so completely conscious of every part of her and so completely satisfied with herself that it startled her. She had not felt this way about herself before. Why had it

taken so long? Nothing seemed to matter but the feeling that was filling her up with immense peace and pleasure. Even though she knew she could never realize the love she felt, she did not feel discouraged by it... It felt so good to know she was this capable of loving someone. (179)

祖母への愛と同様に、T.J.への全存在で感じた愛、平和、喜びによりマリリンの“stillness”からの目覚めが始まる。

Part 4 マリリンと娘の和解：心の故郷への回帰

Part 4は「あることが女性を震撼させる」“Some things make a woman tremble.” (201)で始まる。そして、それは大地の震動 (a quake) となる。

Besieged from without, warring from within, the children of sky woman imploded and the earth quaked at the sight of it all... Earth woman wept, tried hard to relieve the quake going off inside. This quake is a stubborn one, born of female procreative tenacity and indomitable love. It refuses to quiet itself until it is spent.

In every village, town and home this quake besieged all our mothers' daughters... Finally, one woman faced the crest of Westwind's first breath and uttered, “We are sick, we need to heal” — and a circle was born. Westwind picked up her words, skirted them across the land. In the tears of his mother's rain he deposited the sound. It dropped helter-skelter on cities and towns, and ultimately reached the ears of those who could still hear the rain from some magical place of potential peace. Other circles were born. Other women repeated the refrain. “We are sick, we need to heal.” (204-5)

そして、ついに一人の女性が、西風を受けて、「私たちは病気だ。癒しの必要がある」と言ったときに、連帯の輪が生まれ、またその輪は他の輪を生み、それがマリリンにも震撼として感じられた。このように変革へのうねりは、エルジーやマリリン個人の問題ではなく、共時的に発生してきている。

マリリンの中で、現実と夢の世界の差がどんどんなくなっていっていく。

If she had not become so biased by Western society's narrow perception of what constitutes reality, living beings and social interaction, she would have know (n) that her body was moving as though it were bucking the wind because it was. If she had not left behind the science of her own people's holy knowledge she would have known a great gift was being born in her. Truth, earth truth, was visiting her. She had a place in which to search the moments of passing from the doorway of the physical to the world of the spiritual, but she closed the door to it, locked it away. Tenaciously and willfully, she refused to use the key to return to it in a conscious or sane way. (206)

夢うつつのような精神界と現実の自由な往来に、マリリンは逆らってきたが、先祖の聖なる知識から阻害されていなければ、それが‘大地の真実への恵み’であるとわかったであろう。

しかし、マリリンはトロントから帰ってから、真実と向き合う勇気を持ち、子供たちとの間にある膿みを出し切る。娘のキャット (Cat) とリンディー (Lindy) と食事をしながら、母親のように自分のことを気遣う娘に、自分のイライラをぶつけるマリリンに娘たちが初めて応酬し、今まで閉じていた「蛇の缶」が開いた。

どこまで相手に踏み入っていいか領域を設定していないこと、母親が子供たちに規定したルールに従っていないこと、その規則や体罰は間違いであったこと、新たな合意が必要であること、それらを缶から出て来た7匹の蛇やミミズとしてマリリンは見る。5匹目の蛇はここでは出てこない。蛇が出たことにより、その象徴である心に潜んでいる‘恐怖’がなくなったことを示唆している。

その後家へ一緒に帰り、ずっと前にそうすべきだったと言いながら、マリリンは娘を叩いたスプーンを割り、娘たちも割れた半分を折る。

She hungered to express love to them in the way she felt it. She had always felt the love. She had just never been able to push through the thick, sticky web of stillness her love seemed to be captured in to express it. It felt as though her love for them, for life, had been squeezed small, dense and encased. (234)

愛はあったのに、“stillness” が邪魔をして表現できなかった子供への愛をマリリンはようやく感じとることができる。

最後は子供のころに聞いた祖母の話とそれを実行することで終わる。

The ocean is vast, deep and at the bottom lives a woman — the mother of hidden being, of thought. She helps us to think deeply before choosing, to consider carefully before acting, and to see broadly before naming. (246)

その話は海の底にいる‘思考の母’なる女性の話で、そこへ行ったら永遠に勇気を持ち続けられるというその女性のいる海へ行こうとマリリンは子供たちを誘う。

行く途中でマリリンは初めてドリー (Dolly) の事を子供たちから聞く。

Dolly is like our other mother. A seer and healer helped us to carry on loving you, despite all the memories. Memories of hurt, of absence, of your dead eyes, of no Daddy, of waking up and knowing you were hung over, knowing you hid your boozing. Memories of praying you would stop and just love us. (248)

母親不在の状態であったときに母親のように子供たちを支え、マリリンを愛し続けるように教

えてくれた長老ドリーの話をキャットがしたとき、一番大きな蛇‘恥’が出てきた。その身体の下には、必死で変化を祈るマリリンの姿があった。

さらに、子供たちにどうしてある時から変わったのかと聞かれて、「自分をくずだと認めたからだ」“First I had to accept that I was a piece of shit.” (249) と答える。事実を認めることが最初の変化の始まりであった。

河口の対岸にドリーの家が見えるところまで来て、祖母の話をマリリンは思い出す。「二人の男が一人の女のことで争った。止めるように言ったが、争いは収まらない。湖にその話をすると、湖は二人を連れて来て、カヌー競争をさせるように言う。二人がこいで出ると湖は二人を飲み込んでしまった。どうしてそんなことをしたのかと聞くと、湖は『前進するためには、時に出だしに戻らなければならないのだ。』と言う。」

祖母の家のように小さく質素な「ドリーの家が、マリリンと娘たちにとっての始まりのようであった。」(250) で *DaF* は終わる。

Ⅳ マリリンの変容 (transformation)

何世代にもわたって続いてきた“stillness”を打開し、「種族としての意識、系譜の記憶、創世」“tribal consciousness, lineage memory, old beginnings”に回帰するには、外的要因からの大きな働きかけが時に必要である。*DaF*では、それは、風、自然に耳を傾けること、祖母の愛に始まる自分のルーツに立ち返ること、人を愛することにより自分の密封していた感情を解き放つこと、恐れずに真実と向き合う勇気を持つことにより文化の継承者である娘たちと和解することである。結局、最終的に、問題解決の鍵は外にあるのではなく、「女性自身の中にある」(199) のである。

祖母の話のように、前へ進むためには全てを破壊し、出発点に立ち戻らなくてはならない。その出発点が先住民長老としてのドリーの家であり、そこがマリリン親子が心の故郷として新しい親子関係を築いていける場であると言えるだろう。

孤独感、罪悪感、恥に悩み続けたマリリンであったが、マリリンにとっての祖母のような役割を娘たちにしてくれていた長老がいたことが、種族としての系譜を持続させていた。これからはキャットに宿る新しい命を軸に、過去から開放され、新たな親子関係が始まることだろう。

Ⅴ おわりに

この本はマラクルの娘「コロンパ (Columpa) とタニヤ (Tania) に捧げ」られている。このマリリンの変容の旅はマラクルの旅でもあり、ここにたどり着くまでに長い年月が必要であったことがわかる。

この作品は‘セイリッシュ語り聞かせ’の形式で語られているために、この伝統を持たないものには自然界からの干渉が素直に受け入れがたいところがある。しかし、それを西洋的教育を受けたマリリンの視点で、あがないながら読み進んでいるうちに読み手を話し手の世界へ引き込んでいっている。ただ、サリー・クーパー (Sally Cooper) の言うように論法があいまい

で、抽象的なところ、矛盾するところ(1)があり、何度読んでもマリリンが夢で見た“purple ball”のように筆者には意味不明なところもある。サスペンスで聞き手を引っ張っていく語りとしての技法も使われており、読み手はちりばめられているパズルを合わせていき、最後までいくと全部が一つのピースとして纏まるように構成されている。

また、この作品で取り上げられている児童や女性に対する虐待は、筆者が3回ほど出席した『北米先住民長老と若者の集い』で地球環境の危機と共に毎回中心議題となっている。したがって、これが先住民社会が現在抱えている大きな問題であることは確かである。自分のルーツを味方にして、長い痛みの歴史から抜け出す勇気を持たなくてはいけないこと、永遠に続く女性の、母親として、文化を担う継承者としての役割を再発見することをマラクルは訴えている。

注

- (1) Chief Dan George (1899–1981) はCoast SalishのBurrard Indian Bandの首長で、*The Best of Chief Dan George* は彼の詩・語録集である。晩年俳優としても活躍し、先住民の歴史や窮状を訴えるスポークスマンとなった。
- (2) 著者に神話に関して尋ねたとき、この本を読むように薦められたが、これはDaFの前章と言ってよく、この作品を読むことによりDaFの多くのキーワードの意味が明らかになる。
- (3) “World War I (133–43)” という短編は、語り継がれてきた説話だとしているが、HIM, un-named animal, probably extinctとSHE, definitely extinctと説明の付けられた登場人物に、Eagle、Raven、four-legged people、winged-peopleが出てくる。洪水の危機の中で、HIMの貪欲さのために、SHEは絶望して死に、動物達も殺し合うことを学び第一次戦争が始まる。しかし、EagleとRavenの干渉により、最後には、動物たちは、生存の法則を合意する。
- (4) Original storyの使用許可を先祖に求めることはできないので、myth makerとして、それを脚色して書くのだそうである。(2001年、著者談)
- (5) 2008年7月24日から29日までLack du Flambeauオジブワ族居留地(アメリカWisconsin州)で開催され、約50種族200名が参加した。この集いは年1回場所を変えて開催されている。
- (6) 人里はなれたところに4日間こもって断食をして夢やヴィジョンを受けるために祈る。
- (7) 同じことをBierwertもCoast Salishの語り聞かせの調査の結果として述べている(66)。
- (8) Oka CrisisとかMohawk Crisisとか呼ばれた危機(1990年7月–9月)は、先祖の墓地である聖地Oka(Quebec州)にゴルフ場が建設されることに反対してモホーク族が蜂起したのを、カナダ連邦政府が武力により弾圧しようとしたことに端を発する。カナダ全土で先住民による支援運動が繰り広げられ、武力弾圧は失敗に終わった。同年夏に筆者がBC州を訪れた際にテレビ、新聞の報道はこれ一色といってもいいほどであった。
- (9) 埋葬の聖地を守るためにIpperwash公園(Ontario州)を占拠したインディアンDudley Georgeが、武装していなかったのに、警官に射殺された。2007年に訴訟への判決が出、州政府に責任があるとなった。
- (10) 1990年にLilwat居留地(B.C州)でスキー場の開発に反対して、道路を先住民が占拠した。
- (11) We are slaves with our own consent. As women, we do not support each other. ... Let us

all blossom beautiful and productive. (18-9) お互い同士支援し合うことにより美しく、建設的に花開こうと呼びかけている。

- (12) Salishを含む北西海岸インディアンの部族は通常4から6のクランから成り立っているが、この制度は母系であるので、本来女性が村を出ることはなかった。

参考文献

- Bierwert, Crisca. *Brushed by Cedar, Living by the River: Coast Salish Figures of Power*. Tucson: University of Arizona Press, 1999.
- Carlson, Keith T. (ed) "Where the World Not Quite Right." *A Stolo Salish Historical Atlas*. Vancouver: Douglas & McIntyre, 2001.
- Carmen, Arzwa Azurmendi. "Healing the Colonial Wounds: Autobiographical Migration in the Work of Lee Maracle." Universidad Computense de Madridでの学会発表原稿
- Cooper Sally. "Tale of Abuse Grounded in Native Myths." Bell Globemedia Interactive Inc., Sep. 2002 (web)
- Dadey, Bruce. "Dialogue with Raven: Bakhtinian Theory and Lee Maracle's Ravensong." *Studies in Canadian Literature*, vol.28. Fredericton: University of New Brunswick, 2003. pp.109-31.
- Edmonds, Margot and Ellia E. Clark. *Voices of the Winds: Native American Legends*. New York: Facts on File Publication, 1995.
- Fee, Margery and Sneja Gunew. "From Discomfort to Enlightenment: An Interview with Lee Maracle." *Essays on Canadian Writing* (Fall 2004). Toronto: York University. pp.206-21.
- Kroeber, Karl (ed.) *Native American Storytelling: A Reader of Myths and Legends*. Blackwell Publishing, 2004. pp.1-8,
- La Flamme, Michelle. "Family and Forever", *Canadian Literature* vol. 182 (Autumn 2004). pp.154-9.
- Macfarlane, Karen E. (Eigenbrod, Renate and Jo-Ann Episkenew. ed.) "Storying the Borderlands: Liminal Spaces and Narrative Strategies in Lee Maracle's Ravensong." *Creating Community: A Roundtable on Canadian Aboriginal Literature*. Penticton: Theytus Books, 2002. pp.109-23.
- Macfarlane, Karen E. "Lee Maracle." *The Literary Encyclopedia*. November 2006. (web)
- Moffatt, John. "Response and Responsibility." *Canadian Literature* vol.184 (Spring 2005). pp.176-8
- Maracle, Lee. *Bobbi Lee, Indian Rebel*. Toronto: Women's Press, 1990.
- I Am Woman: A Native Perspective on Sociology and Feminism*. Vancouver: Press Gang Publishers, 1996.
- Sojourner's Truth and Other Stories*. Vancouver: Press Gang Publisher, 1990.
- Sundogs*. Penticton: Theytus Books Ltd., 1992.
- Ravensong*. Vancouver: Press Gang Publishers, 1993.

"Where Love Winds Itself Around Desire." *First Fish & First People: Salmon Tales of the North Pacific Rm.* Seattle: University of Washington Press, 1998. pp.161-79.

Bentbox. Penticton: Theytus Books Ltd., 2000.

Will's Garden. Penticton: Theytus Books Ltd., 2002.

Daughters are Forever. Vancouver: Polestar, 2002.

O'Brian, Susie. " "Please Eunice, Don't Be Ignorant." The White Reader as Trickster in Lee Maracle's Fiction," *Canadian Literature Vol.144* (Spring 1995). pp.82-96.

Thom, Jo-Ann. "Review of Sojourners and Sundogs." *Canadian Literature vol.174* (Winter 2002). pp.165-6.

浜由美子 「リー・マラクル：先住民作家としての道程—*Bobbi Lee, Indian Rebel* より *Ravensong* へ—」『カナダ文学研究 第9号』カナダ文学研究会、2002年、pp.41-57

浜由美子 Lee Maracleへのインタビュー（トロント2001年8月、東京2003年10月）

ABSTRACT

Lee Maracle is a prolific Coast Salish writer and university professor, known also for her activities in politics, feminism and stage, and for her workshops to advance the quality of the First Nations' life. Maracle's writing has focused on the modern-day consequences of centuries of assimilation, racism, and cruelty. Furthermore, by presenting conflicting emotions such as pride, guilt, shame, and anger, as well as the ambivalent feelings of living in two different cultures, she has revealed the crisis of identity in many of her works.

Daughters are Forever is a story of an abusive mother, Marilyn, who herself was the victim of abuse. Maracle presents the inner struggle of Marilyn to return to the natural, ancestral way of life and to restore the sound relationship with her two daughters. This is also a journey of transformation to reconcile not only with her daughters but with herself. This struggle is also not unique to Marilyn, but has been fought among many First Nations' women, generation after generation, since the arrival of new-comers.

Maracle emphasizes the power of nature, love, remembrance, and storytelling as paths to healing and reconciliation. This paper is to discuss the First Nations' cosmology and storytelling techniques for the better understanding of this work and to examine how Marilyn's transformation as a woman and a mother is achieved through listening to natural forces and ancestral knowledge.

The story is told within the framework of the First Nations' mythology, Coast Salish storytelling and dream interpretation traditions. The winds, especially Westwind, are the intervening forces to drive Marilyn into action, passion, intelligence and patience and bring her back from 'emotional paralysis' to the state of being alive and at peace with herself.

The book is divided into 4 Parts: Part 1 depicts the First Nations' life before colonization

and its aftermath; Part 2 describes Marilyn's alienation and that of the First Nations' communities, and the forces that tore them apart; Part 3 explains Marilyn's struggle with her past and present and the way to free herself from her 'stillness,' in which the First Nations' people have been captured and encased; and Part 4 leads to a place where Marilyn and her daughters can recover the spiritual home to which they once belonged.

Maracle concludes how important it is for the First Nations' people to recover the cultural heritage by listening to nature, to the inner voice, and to the elders. The significance of a woman's role as a mother, 'the keeper of cultural survival,' cannot be overemphasized. Women need to have courage to face the truth, and passion and love to transform themselves. "Women are forever."